

第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

第3回委員会

議事要旨

日 時：平成20年10月17日（金）18:30～

会 場：武蔵野市役所西棟812会議室

出席委員：高田委員、江上委員、小木委員、橘委員、島森委員、渡邊委員、中村委員、
井原委員、和久田委員、島田委員、井波委員、近藤委員、増田委員、清本委員、
西村委員

1. 議事

①「武蔵野市のコミュニティ（センター）を巡る課題と問題点」について（前会議論の続き）

（小木委員）自主参加、自主企画、自主運営という優れた理念を掲げたコミュニティセンターではあるが、実際には、誰でも入りやすい雰囲気ではない、また、限られた人たちの利用は多いが、世代を超えて誰でも利用できるという現実ではないのではないか。そのあたりでどういう工夫があればいいのか。

2点目、コミセンが、子どもの居場所として、親も子どもも安心して利用できる場所にならないか。

3点目、大災害の時に救援の拠点としてどのような力が果たせるか、日頃から繰り返し検証しておくべきではないか。

（中村委員） 前回の各委員の意見を見たところ、それぞれの立場で様々な意見が書かれているが、これを全部コミュニティセンターに押し込むことはできないだろう。どの辺の絞り込みをするのが非常に難しい。

（井波委員） 団塊世代はこれから地域社会の一員となっていていろいろな活動をやっていかなければいけない世代だと思うが、50代、60代前後の男性を対象としたプログラムが非常に少ない。これから地域社会を背負って立ってもらう人たちをできるだけコミュニティセンターに招き入れるようなプログラムが必要ではないか。

質的な問題として、以前団塊世代にアンケートをとったところ、生涯学習、教養を高めたい、趣味を持ちたいという方がかなりいるので、そのようなプログラムをできるだけ組み入れてもらいたい。

また、そうした自主企画や講師を探す際に、横断的に相談に乗る任意のグループを作ってもいいと思う。

(高田委員長) 「コミュニティ協議会人材リスト」というのはどういうものか。

(江上副委員長) 昨年度のあり方懇の議論の中で、コミセン間のネットワークを作る必要があるだろうという議論があった。それから、地域にはさまざまな人材がいるが、お互いに知られていないという現状がある。そういう2つのことから考えて、各地域のさまざまな人材を他のコミセンにも紹介できるリストがあったらいいということで、各コミセンから「うちにはこういう人がいます」ということを申告していただいて、リストにした。

(小木委員) 現実に活用されているのか。

(渡邊委員) 今のところ頻繁に活用されているとは言い難いと思う。

(近藤委員) コミュニティとコミュニティセンターについて、ここで話し合うのは、コミュニティセンターのことだけではないだろうという思いが1点。私は「コミュニティ」を地域社会、その拠点となる場所を「コミュニティセンター」ととらえている。

2番について、コミュニティを成立させるのはメンバーとその個々の人間とそのネットワークである。老若男女、多様なメンバーがそれぞれにネットワークを持っているわけなので、本当に多様性のあるものがコミュニティの中に含まれている。たとえば、関前南小の子どもたちは家庭や学校、隣近所、地域のかたがたの他に、いろいろなところのかたがたのお世話になって関わりを持って生活している。もしこれが60歳男性などとしたら、コミセンに行っている方もいると思うが、まったく関わりのない生活をしている人もいるだろうということで、コミセンだけでコミュニティを考えるのは、なかなか難しいのだろう。また、時間が限られているので、対象として何を取り上げるかを焦点化することが必要なのではないか。

3番のコミセンについて。関前南小の子どもが放課後を過ごしてイベントに参加したり、お叱りを受けたりという関わりの中で、地域の教育力にも関わりがあるが、どのようにしてコミセンも含めて地域の教育力を高めていくかということが1つ。それから防災に関して、学校も防災の大きな役割を担うところなので、コミュニティセンターと学校との連携

を深めていくことが課題だととらえている。

(高田委員長) コミュニティは地域社会、コミュニティづくりの拠点になる場所がコミュニティセンターであるというとらえ方は、その通りでいいと思う。コミセンはいろいろな人が、いろいろな時に来るところだから、対象を特定化するというのはどうだろうか。井波委員のご指摘のような、特に50代60代の男性をターゲットにしたプログラムを実施するといったことは可能だろうが、もっと広いものがコミュニティだと思う。

②今後の委員会の進め方について

(事務局) 諮問事項が4つある。1つ目は市民間の連携を支え、地域の活力を高めるコミュニティのあり方に関する事、2つ目はコミュニティ活動の活性化に関する事、3つ目が地域活動の拠点としてのコミュニティセンターの機能の強化に関する事、4つ目としてコミュニティセンターの移転、新築、改修等に関する事。1、2、3について、およそ10月から12月ぐらいまでにご検討いただき、1月ぐらいに各コミュニティ協議会との意見交換会を行う。2月から3月に、4つ目を検討するという予定を案として考えている。

(高田委員長) コミュニティセンターの移転、新築、改修は八幡町だけではないのか。

(事務局) コミュニティセンターの改修等もあるので、陳情の出ている2件だけではなく、その他の改修等も含めてご議論いただきたい。

(高田委員長) その後の予定は。

(事務局) 第1回に大まかな予定を出しているが、当初の予定としては、21年4月頃に市民アンケートを実施し、中間報告が8月頃、最終答申が12月としている。20年度の3月ぐらいまでを予定として申し上げたが、その先については、進捗を見ながらまた協議していくということになる。

(西村委員) 16 コミセンとの意見交換の前に、簡便な形でコミセンの理解を深めることができないか。具体的に言えば、コミセンに行くとか、あるいはコミ研連に行くなどさまざまな形があるし、場合によっては全員が同じことをしなくてもいいと思うが、何らかの形で始めのうちにコミセンの理解を深めたほうがいいのではないかと。

(橘委員) 運営委員会でどのようなことが討議されているのかを見るのが、一番よい。それによって全て動いていくので、現在のコミセンのあり方、コミセンの置かれている立

場や状況がよく分かると思う。

(清本委員) 賛成。もう1つ、毎年総会の前に各コミセンが出している活動報告を見ると、かなりのことが分かるのではないか。

(渡邊委員) コミュニティ活動の実態を文書で知るには、総会の議案書、ニュース(広報紙)、運営委員会報告を見るのも一案。

(江上副委員長) 議論が後先逆だと思う。ここで何を議論するのかが決まってから、それに対してどういうことが必要なのかという議論をするべき。

どういうレベルで何を議論するか。個々のコミセンの悩みを調べあげて、それに対する対応策を全部ここで検討するというのなら、各コミセンをみんなで回らなければいけないかもしれないが、そういうレベルの議論をここでするのか。議論すべきことと、それに対する方法論を分けて考えないと。方法はあとでいい。

まず論点整理について、まずこういった項目でいいのかということが1つ。

また、各論点について、どういうレベルの議論をするのかということが大事ではないか。ここで具体的な解決策を議論するのか、それとももう少し抽象的な全体の方向性を議論するのか。

かなり具体的な議論をここでしようということであれば、コミセンの運営委員会でどういう議論をしているかは、共通理解として知っていたほうがいいし、もう少し抽象的な議論であれば、それぞれの立場から、ご存じの範囲で意見を言っていただければいいと思う。

(高田委員長) 具体的な解決は委員会がやることではなく、コミセンがすることだと思う。委員会は、コミセンの抱える問題について、それぞれが解決に向かうための枠組み、支援策などを出していく。もう少し大きな枠組み、武蔵野市のコミュニティの方向付けをやるのがここだと思う。

(江上副委員長) 何を議論するということと、レベルの問題を、10月から12月ぐらいで議論し、では個々のコミセンに何を尋ねるのかをまとめておくということではないか。1月のヒヤリングで何を聞くかを決めておかなければいけない。

(和久田委員) 最近市民の方がよくコミセンを利用するようになったと思う。私がこの委員会に参加したのは、そういうふうになってきて、これからどうするのかということを考えることだと思った。今まではいろいろな事業をして人と人との関係をよくするということで、私たちも頑張ってきたと思うが、これからは、コミセンというのはもっとどうし

たらいいのかということを考えるのがこの会ではないか。もう少し今までと違う、これからどうするのかということで、コミセンやコミュニティを考えていくのではないかと思う。

(高田委員長) その通り。しかし、これからどうするかを考えるためには、今どうなのかがある。コミセンの現状を知るために、コミュニティ運営委員会を見るといったことがいいのではないかという話になっている。

そういったところを議論して、1月からのヒヤリングでは、何を尋ねるかということ、こういう問題がいろいろなところで起きているとすると、そちらのコミセンではどう対応しているのか、というところを聞いていく。現状を聞きながら、方向性も聞いていくということ。

(橘委員) コミュニティのあり方がどんどん変わってきている。第六期として、今後のコミュニティのあり方、方向性を出すためには正確な現状認識が必要。その上でコミュニティの方向性、あるべき姿を出したらいいのではないか。

(井原委員) コミセンをよくしていく、使いやすくしていくのはそれでいいと思うが、まずコミュニティとコミュニティセンターがつかない。

前回の話を伺っていて、図らずもコミセンは排他的になっているという気がした。というのは、コミセンがそこにある理由がすでに違う。コミセンの運営に実際に関わっている方たちは、基本構想など今までのことをずっと知っていて、思い入れもあると思う。どうやって人と人をつないでいくかということを実際に考えて運営しているということは分かった。しかし、私にとってコミセンはすでにそこにあるもので、便利なレンタルルームでしかない。

この間意見として出ていた防災のための拠点になって欲しい、そのための機能が必要だとか、地域社協の事務所的な機能を持って欲しいという意見のほうが私のイメージに近い。

基本構想や「成熟社会におけるコミュニティの在り方」を読んだが、どこかコミセンのあり方でしかない、コミセンが発展すればコミュニティも何とかなるのではないかといったことで、それは逆だと思った。まずコミュニティがどうあるかという中で、コミセンがどうあるべきなのかを考えなければいけなかったはずなのに、話が入れ替わっている。

保護者にとってはコミュニティというのは横のつながりだけで、縦のつながりが一切ない。私の子どもの頃はあったが、今はそれを感じられない中で、どうしていけばいいのだろうか。コミセンに出向いて行って、縦につながるものなのかどうなのか見えてこない。

(高田委員長) レンタルルームになっているというご指摘だが、それでいい。市民が何かやろうという時、そこが使えることでさまざまな市民活動の支援になっている。レンタルルームしかないということではなく、それが1つの施設としての目的である。

(井原委員) この間の音楽室の話のことも、2人以上でないとコミュニティではないからだめだ、というのは排他的だと思う。1人1人が寄って、それがコミュニティの発展になる、そこがコミュニティの拠点になる、コミセンはそういうことを目指していたのではないのか。貸し館業務でいいと言うのなら、それは。

(高田委員長) いいというわけではない。貸し館業務というものが、様々な活動にとってプラスになる。支援する枠組みを作ろうとしていたはずだから。

(井原委員) そうすると、コミセンはコミュニティを作るための拠点ではなく、コミュニティ同士をつなぐ拠点という考えでいいのか。

(高田委員長) コミュニティ同士をつなぐというのは、たとえば劇団とこちらの子育てのグループとを、という意味か。

(井原委員) 同じようなグループがあって、共同で何か企画をしたいということがあった時のコーディネートをする力が、今、コミセンにあるのか。コミュニティ同士をつなぐといったことができるといいのではないか。

(高田委員長) それは作ればいい。こうなればいい、今できていないではないか、というところをできるようにしていくのが、この委員会である。

(高田委員長) 資料2で、コミュニティのあり方についてというところがある。「コミュニティとは何か」「コミュニティ活動とは何か」「コミュニティセンターとは何か」「コミュニティ協議会とは何か」ということが、論点としてある。コミュニティのあり方について、こういうことが議論されたというところがある。これを深めていくということもある。今のさまざまなかたの問題提起がここに出ている。コミセンを論ずる前にコミュニティを論じろ、ということなので。これについて議論するか。

(井波委員) もともとこの委員会が発足した目的が、ここに書かれている、地域コミュニティの活性化を目的にコミュニティとコミュニティセンターのあり方について検討するということ。そこに行くために、たとえば理念的なことをまずやって、具体的なところに落とししていくのか、それとも逆なのか。どこかに絞ってやるのか。

(井波委員) スケジュールだが、順番としては、この委員会の委員が日頃思っている問題

点、意見を出した。今度はその中から何と何を各コミセンの協議会に問いかけるか。

従って、進め方としては、各論に入るのではなく、何を今われわれが把握しないといけないのかと。理念が崩れているのか、変わってきているのか分からないが、そういうことも問題であるなら、それも含めて、各コミセンに投げかける。では何を投げかけるのか、要するに検討課題の抽出をまずやらないといけないのではないか。

(高田委員長) 個々のコミセンに何を尋ねるか。ヒヤリングのポイントということが、今井波委員が言ったところ。回りのやりたいことというのは、おそらくさつき和久田委員がおっしゃった、これからどうするかを考えるということ、それを何とかしていくわけである。これからどうするかというところは、いろいろやっているうちに最後に出てくるはず。コミュニティとは何かということを考えるところは、ちょっと難しいところがある。コミュニティとは地域社会だというぐらいでいいという気がする。

(高田委員長)

先ほど井原委員が縦につながるのか、ということと言われたが、縦のつながりというのはどういうことか。

(井原委員) 世代間のことである。保育園の保護者、幼稚園の保護者、小学校のPTAという同じ立場の人とつながることはあるが、それが上につながっていかない。もちろん卒業した父母の人とつながっていけばいいのかもしれないが、それも現実問題としてはない。やはり自分の子どもの頃の記憶があるので、地域のおじさん、おばさんが自分のことを知っていたというような状況がこの先も続いていくのかどうか分からない。

青少協の中にPTAの役員が出向いていっているが、青少協は地域のおじさん、おばさん、もしくは自分たちに近い方たちがいるが、その方たちとずっとつながり続けている人というのをまだ見たことがない。どうなっていくのか。青少協の方たちに全て投げってしまうということではなく、せっかくきっかけとしてあるはずなのに、発展していかないものなのか。

(高田委員長) この委員会でやろうとしているところからいうと、そういったところがないとなると、それは課題である。現場からそう思われているわけだから、逆につながりを付けるためにはどこがどうするか、ということを考えていくところである。今青少協がうまく機能しているかどうか分からないが、それが問題だったら、青少協とどういうところをサポートしていくようなものがあれば、世代のつながりができていくのかということ

ろを考えていこうと。それはとても実践的なところではないかと思う。

最初に言われたコミュニティというものは何か、それからコミセンの役割を言うより、今どういふところが問題になっていて、それに対してどういふことができるかということをも具体的に詰めていったほうが、物事は発展するのではないか。

コミュニティとは何か、コミュニティ活動とは何かということを議論するか。

(江上副委員長) 井原委員のお話は、まさにそここのところがなければ議論が出発しないだろう、というお話でした。

(高田委員長) もっと具体的に、井原委員から出た世代、そういうところをどうやって考えるかということ。井原委員の思っていた子ども時代のことを地域で実現していこうとするならば、そういうものがあればここでもやれる。そういうところができるのではないかとされているのだから、そういうものを考えて、具体的に行ったほうがいいのではないか。コミュニティとは何かということから発想するより、具体的などころから発想したほうが言いやすいのではないかと思ったので、こちらのほうに振ってみたのだが。どうか。

(中村委員) 青少協では、活動の担い手が非常に少なくなっている。本当に存続の危機ということをも、毎年どこかで言っている。しかし、どなたかにお願いしてどうにかやっていただいているが。そういう意味では青少協がこれからどうなるのだろうと、かなり危機意識を持っている。

(高田委員長) コミセンと青少協が関われば、何かできるか。

(中村委員) 青少協でも考えている。昔に比べてだんだん弱体化している中で、単独ではできない。「青少協と連携できないか」という意見があったが、もともと青少協自体が地域の団体の集合体である。そういう意味では、連携するのは普通のはずである。しかし、今どちらかというとも青少協は青少協、コミセンはコミセンとなっている感じが各地域で見受けられるので、それを何とかしなければいけないと、青少協では考えている。

(高田委員長) そういったことをここで考えていかなければいけない。これはコミュニティづくりというところがベースだから、中村委員が言うように何かやろうと思っているけれどできないということをも、やれるような仕組みとキーパーソンを設定しなければいけない。そういうところがつながっていくアイデアを出していこうとしている。今おっしゃったところは、うまくいけばコミュニティづくりにつながっていく。そういった時に地域

の核として設定されていたはずのコミセンはどうなっているのかというところで、もしそれがうまくいっていないのなら、そのコミセンの何らかの改革、こういう方向にしたらどうかということがある。

(江上副委員長) どうしていくかということは大事だと思う。しかし、その時にどういう発想法を取るかが重要。青少協、PTA、学校がある、そういうこれまでの枠組みの中でこれからのことを考えるのか、それとも、もう青少協もPTAもなくなっていかもれない、学校のあり方もコミュニティスクールのようなものがどんどん入ってくる。そうすると、もう今までの枠組みの中では考えられない。そこまで発想を転換して考えるのか。

(高田委員長) PTAはなくなるのか。

(江上副委員長) ないところもある。PTAが解散し、青少協のようなものもなくして、学校サポート隊というものを作り、個人単位でみんなが集まってきて学校をサポートするといったものがある。

(増田委員) 学校のPTAは役員のなり手がいないため、これから衰退していくのではないか。青少協も存続の危機とおっしゃっているので、最後の砦はコミュニティセンターなのではないか。

(清本委員) 井原委員の言うような、ご自分が子どもの時には近所のおじさんやおばさんが自分のことを知っていて、声をかけてくれたりする状況というのは、たしかにあった。

しかし、今はそういうものが全然ない。社会のつながり方自体がものすごく薄くなっているという感じがする。

(井原委員) 46年頃この基本構想が出ているが、当時は地域のつながりがある上でコミセンがあったのではないかと思った。

(高田委員長) 地域のつながりがなくなったからコミュニティ構想が出てきた。

(清本委員) コミュニティ構想というのは新しいふるさとづくりである。

(高田委員長) 当時すでに昔の人が思っているような関係が切れてきていた。特に武蔵野市はベッドタウンで新住民が集まって、そこに昔のようなものがないので、何とかつながりを付けていかなければいけないというところで、コミュニティという概念が導入されてきて、やった。コミュニティというものを、新しいつながりとして。言葉として言えば新しいふるさと、人がたくさん集まっているのだから、そういうものを武蔵野市の中に実現しようとした。その核となるところとしてコミセンを作った。

なぜコミセンを作ったかという、武蔵野市には一部には町内会はあるが、全体の連合町内会というものがない。それでは、市としてはやりにくいということで、コミセンができた。そういう面がある。

(渡邊委員) 八幡町では、戦後、都営住宅ができた後に、シンワ会という組織ができて、民主的な運営のもとですばらしい実績をあげてきた。

それがコミセンができたので競合して、コミセンができて5年目に解散した。武蔵野市はそういう自治組織を否定し、それに代わるコミュニティセンターを作って、統合した。

(江上副委員長) つながりがあったからコミセンができたという方が当たっているような気がする。つながりが切れたからコミュニティ行政が始まったというのは、学者や行政の思いこみだと思う。なぜなら、つながりがなかったら、コミセンを作って運営できるはずがない。

昔の村のように、がっちりみんながつながっているという状態ではなかったと思う。しかし、PTAのお友だちがいたり、幼なじみがいたり、そういうある程度のネットワークが地域にあったからコミセンが建てられたし、運営もこれまでやってこられたのだと思う。

しかしそれから30年経って、今まさに本当に切れてきている。育ってきた子どもたちが層に積み重なってこない、それぞれがぼつぼつと、1枚1枚バラバラで、1つの地層を作るような感じになっていない。それが年齢別でも、団体でも。紙がバラバラと散らばっているような感じ。それが行くところまで行くと、個人が層をなさなくなってきた、バラバラ、ばらばらな状態になっている。

そういうばらばら状態になってきているのに、今までのある程度のつながりがあることを前提にしてこれからのことを考えても、現実味のある議論にならないのではないか。

(渡邊委員) コミセンは排他的になっているという指摘があったが、運営側としては、排他性があるとはならないということで運営している。

窓口も含めて、新しく来た方にできるだけ情報を知らせ、できるだけその人の便宜を図って、引っ越してきた人がまずコミセンに相談に来るような、そんなコミセンになりたいと願っている。

ところが排他的であるとする、ということが排他的で、どうすれば排他的でないようにできるかが、運営のあり方の問題だと思う。

いろいろな問題、悩みも多いのが現状で、新しい情勢の中でコミュニティのあり方、コミセンのあり方、運営のあり方はどうあればいいのか、日夜努力している。

(島森委員) 今までコミュニティ活動をいろいろなところで、いろいろな団体がコミュニティセンターに関わらず活動している部分がある。

前回いただいた資料の中で、「コミュニティセンターに何の目的もなく気軽に立ち寄りにくい」「コミセンをもっと気軽に使えるような雰囲気を作って欲しい」という意見が、市政アンケートに載せられている。時代が変わってきているので、コミセンは前より知られていると思うが、まだまだ知られていない部分が多いと思う。

たとえばコミュニティセンターに行って、何かに参加することによって運営委員となって、活動しなければならないのではないかと考えてしまっている人もいるということが、書いてあった。そうではなく、好きな時に自分なりにそこに何か参加できる方法があるのだろうか、という疑問があるようなことが書いてあった。いろいろなことを疑問に思っている人がいる中で、コミュニティとは何かと、ここで新たに細かく考えるというよりも、知らない人にどうやってコミュニティというものをセンターを通して知ってもらえるのか、もっと活用してもらえて、それなりのコミュニティ活動をしてもらえるのだろうか、と思っている。

私自身がコミュニティセンターには20年前から関わっている。自分は本当にこの武蔵野市が大好きで、ここで生まれて、ちょっと外へ出たがまた戻ってきた。武蔵野市が市民にとって本当に住みやすい町になったらいいと。各地域でいろいろ、住民が住みやすい、たとえば道路問題などいろいろな問題がある。子どものことにしてもそう。せつかく16コミセンもあるのだから、そういうことについてコミセンで少しでも課題になって、議論しながら、議論するまでもなく何かつながるものがあるって、協力できるものがあったり、知りたいことがあったらそういうことを学べるような場所の提供とか。

貸部屋もその1つではあると思う。たとえばコミュニティセンター側が何かをしなくても、そのグループがそれを使うことで、どんどん広がりを持つということも考えられる。と言うからには、そこは気持ちよくその場所を使えて、そこを使ってよかったと思える場所になることが大事ではないか。そういう意味で、コミュニティセンターとは何か、活動とは何かという点にもつながってくる部分があるのではないか。

(高田委員長) 今、ぱらぱらの人間関係ということが出てきたが、ここで考えるのなら、そういったところも全部踏まえてやりたい。

私に関わっているけやきコミセンではかなりつながりがある。だから、放っておいても、というところがあるが、ぱらぱらということ的前提にして、いちばん問題のあるところから考えていかなければいけない。ぱらぱらでいいわけがないので、そこを何とかつなげられるような仕組みができればいい。

(小木委員) 西村委員が書いている活動の中心メンバーの学習の場が少ないとか、企画を立ててもそれを相談したりサポートしてくれる専門家が見つげにくいといったところに市が関われば、やりやすい形になるのではないか。こういうことについて市はあくまで関わらないというスタンスなのか。

(事務局) 基本的には関わらないという意識はない。コミュニティの中でいろいろな問題が起こった時には、研究連絡会の中で意見を出していただいて、方法があれば何か考えるということもある。

(小木委員) いい形でサポートしていただければ、非常に洗練された魅力のある企画ができてくるのではないか。ぱらぱらでいる人たちを惹きつけるには、魅力がある場所でないといけない。今は前を通り過ぎても、看板があるからコミセンだと分かるが、とても楽しそうで、ちょっと入っていききたいという雰囲気はない。そうしたところを、専門家がデザインするといったことは、予算的には無理なのだろうか。

(井波委員) それは企画次第だと思う。お金をかけなくても、みんなの知恵を出し合えばかなり企画はできると思う。ただ従来の人たちばかりで運営して、企画を出そうとすると、どこかに無理がある。だから、そういう相談を受ける何かができたらいいのではないか。

(井波委員) 当面の日程から遡って、いつ、何をやらなければいけないということを決めたほうがいい。コミセンの方に来ていただくにしても、いろいろ意見が出た中からいくつかを取り出して、事前にコミュニティ協議会に渡し、運営委員会、役員会ぐらいで意見を統一したものを持ってきていただかないといけないと思う。

(高田委員長) 1月に呼ぶ。そうすると11月と12月の2回。呼ぶ時にこういう質問をしたいと。

(井波委員) この委員会ではこういう意見が出ているが、どう考えるかと。特に大き

な、これからどうするのかという大きなテーマも出ている。そういうものは時間をかけて向こうで議論していただかないといけないと思う。最低1ヶ月ぐらい前には渡さない。

(小木委員) 資料2の論点を答えやすい形の質問に変えていったらどうか。

(井波委員) たとえば3ページの2-1「コミュニティ協議会の運営体制について」の中から、「どのようなサポートが必要か」とか。論点の中から具体的にピックアップして、答えを出しやすい形に質問に変えてやったらどうか。

(井波委員) 論点の中から意見交換の場で意見交換をする論点をいくつか抽出する作業が必要。たとえば、「コミュニティセンターにはどのような施設・設備が必要か」というものがあるが、これは今度の八幡町の新築に絡むので、入れないといけないと思う。この論点の中から選べば、だいたい外れはないのではないかな。

(島田委員) 話を聞いていると、やはりコミセンありきに聞こえる。その前に、資料26ページで、委員会としては地域活動の拠点としてのコミュニティセンターの機能強化をどうするのかというところから入っていく。2番は、どちらかと言えば、各コミセンで考える部分が多いと思った。

(高田委員長) 今までのコミュニティ推進委員会のものを見ると、2番のところも論じている。どういうふうにやればいいのかということについて、それぞれあるが、放っておくわけにはいかないだろう。

(島田委員) コミュニティ協議会の運営体制について、論点として、運営委員をどのように確保すべきかとあるが、これは一般論ではなく各コミセンの話になると思う。コミュニティセンターをどう周知させるのかということも、地域によって変わる。

そうすると、2番は各コミセンで努力するという部分が増えるのではないかな。ただし、考えるにあたって、3番が意見としてかなり出ているように見える。こういうことこれからのコミセンに期待するのであれば、それをコミセンに「どうですか」と伺うことも1つの方法ではないかな。

(高田委員長) たとえばコミセンをどのように周知すればいいかは、個々のコミセンがどうするかということもあるが、全体でサポートするためにどうするかということもある。従って、全部一概にコミセンにお任せ、というわけにもいかないと思う。

(島田委員) たしかにそうかもしれない。ただ、順番として、3番が最初ではないかな。

(中村委員) そう思う。

(高田委員長) 3番はコミュニティセンターで、2番はコミュニティ活動。順番について、大きさから言えば、活動のほうが大きい。

(中村委員) この論点から見ると、センターのことに言っているように見えるので。

(高田委員長) この流れで考える中で意味があると思う。コミュニティのあり方があって、コミュニティ活動があって、コミュニティセンターがあって、そしてより具体的な八幡町という感じになっている。だから、全部考えなければいけない。

様々な意見が出ており、このままでまとめるわけにはいかないので、皆さんに 1「会としては、この方向で行きたい」、2「この問題を論じたい」、3「各コミセンにこれを聞きたい」ということをそれぞれ書いて送っていただくことにしたい。

○次回について

・次回日程は11月14日に決定。

[了]

第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

第4回委員会

議事要旨

日 時：平成20年11月14日（金）18:30～

会 場：武蔵野市役所西棟 412 会議室

出席委員：高田委員、江上委員、橘委員、島森委員、渡邊委員、井原委員、和久田委員、
井波委員、近藤委員、増田委員、清本委員、西村委員

1. 議事 第3回委員会の宿題に沿って

1) 市民委員会としての「方向」

2) 市民委員会で論じたい「問題」

（高田委員長） 宿題として市民委員会としての方向性、論じたい問題、コミュニティ協議会へのヒアリングで尋ねたいこと、の3つを皆さんにお答えいただいた。

補足などがあればコメントをいただきたい。

（井原委員） 補足すると（資料1 P 6）、まず「コミュニティとは何なのだろう」という部分で、コミュニティ構想などに触れたが、読んでいて分からないことが多かった。コミュニティ構想の中で矛盾したものがなかったのか、という思いがあった。これは細かい話になっていくのではないかと思うが、機会があればやってみたい。

（高田委員長） 次回で江上委員に話をしていただくので、そこで話を通るのではないか。

（井原委員） 特別支援学校のことについて触れた。具体的な例として、保育園に通っていて、市内の特別支援学級ではなく、都立の特別支援学校に通うことになった子どもを持つお母さんが、「保育園で培った子ども同士のコミュニティが失われていくのがとても怖い」と言っていたのを聞いたことがある。機会があれば、「コミュニティが失われてしまう場合がある」ということに対して、どんな施策が必要なのかを考えたい。

この間中間のまとめが出た福祉総合計画がある。また第三次子どもプラン武蔵野の策定も始まる。子どもに対してこういった事業をしていくという話があるが、生活の場をどうやって確保していくかという議論がなかなかなく、もしかしたらこの委員会の中でそういったことが話し合えるのではないかと思い、記載している。

（高田委員長） 他に、中学生について議論したいなどの意見がある。ステイクホルダー、

コミュニティを巡る関係者について考える際に入れたらどうか。

(西村委員) 資料4、当面の進め方の中の②「コミュニティの「力」を高めるのには、どうすればいいか」にプラスしたい。私の文章(資料1 P16)では「行政と協働できるコミセンであるためには、前提として市民が自立する必要がある。自分で考え、語り、選択できるためには、十分な情報の他に何が必要か」という言い方をしている。私はある種の学習の場の必要性、学習の必要を考えている。

コミュニティの力を高めるのはどうすればよいか、といった場合、その中を構成している個人のことも、考えていきたい。

(高田委員長) 市民となるための学習の場、ということか。

(西村委員) 自立した市民であるということは、ただいるだけではそうはならないと、コミセン活動をしていてずっと思っている。やはり自立した市民であるためには、コミセンの中でも学習であるとか、お互いのさまざまな協働の学びをしているが、もう少し広い意味で協働の学びのようなことが必要なのではないか。

(高田委員長) 西村委員の意見のところだが、会としてこの方向で行きたいというところの1. にコミュニティ、コミュニティ活動、コミセン、コミュニティ協議会について整理するとある。これは他のかたの意見のまとめのようなものなので、やらなければいけないと思っている。

今ここで考える方向というのは、こちらでやろうとしているいちばん基本的な枠組みのようなものである。それを根本的に考えなければいけない。

言葉としてはかなり出てくるが「より進化したコミュニティ」、「成熟社会におけるコミュニティ」という言葉もあった。これは古く、2000年前後の話である。また「地域自治のセンターとしてのコミュニティセンター」という言葉も出ていた。いろいろなことを考えるにあたり、根本的な枠組みというものを、この委員会の共通認識としておいたほうがいいのではないか。そこで、次回、副委員長のほうから、われわれがここで論じる時の根本的な枠組みに関する提案があればいいと思っている。

(江上副委員長) ベースのところを問い直さないと議論が進みにくいのではないかとという問題意識である。

たとえば放課後のことをどうするか、中学生をどうするか、お年寄りをどうするか、などの話がいろいろ出てきたが、コミュニティやコミセンは万能薬ではないので、そういったことを全部取り扱えるわけではない。

個々の問題は、コミュニティの問題である以前に、市民自治（住民自治）の問題。市民が自分たちのことをもう一度問い直して、自治的な取り組みをしていくのか、しないのかによって、コミュニティというのは変わってくる。もしする気があるのならば、そういった方向に向けてコミュニティを考えていかなければいけないし、コミュニティ協議会もそういった方向性を持たなければいけない。極端な言い方だが、そういったさまざまな問題を解決するのは行政の仕事なので、基本的には行政に任せておくのだと考えるならば、コミュニティがさまざまな問題に取り組むということは考えなくてもいい。これは両極端な言い方をしているが、実際の落としどころは真ん中ぐらいになるのだろうと思う。

そういった市民自治、住民自治、地域自治といったものを作っていくのかどうか、作っていくとすればどのように作っていくのか、それはコミュニティとは切っても切れない議論だと思っている。

さらに、今も「協働」という言葉が出ていた。市民自治、住民自治というが、それは市民や住民だけのものではない。重要なアクターとして行政がある。行政と協働してやっていこうということが、武蔵野市でも流れになっている。自治を考える上で、行政はどうするのですか、ということをお聞きしないと議論をしにくいと思う。

市民委員会には行政は入っていない。スタートしてしまったから仕方がないが、やはり行政の話も聞かなければいけないと思う。市民と一緒にどうやっていくつもりなのか。

（高田委員長） もう少し言うと、最初にコミュニティ構想があった。あれはまさに市民自治を何とか実現しようという形で考えられていたのではないかとと思っている。基本的なところは市民に任せて行政は黒子に回るということだった。まず、市民というものに力点を置いて、地域の市民がいろいろなものを管理運営していく、例の自主三原則だが、そういった形でやっていくという方向を出した。

それから30年以上経っている。その時は市民に力点を置いて、市民が力を持つように、エンパワーメントのような形で中心に置いたが、ようやくいろいろな形で市民が出てきた。

そうなってくると、行政は今までは黒子に回っていたが、協働の時代になってくると、市民と行政が対等な立場で、それを保持するのは非常に難しいが、地域の自治というものを考えようという時期になってきたということではないと、これからのコミュニティを考えるのは難しいだろうということだと思ふ。

（江上副委員長） 1つだけ補足すると、何か自治的な枠組みのようなものをコミセンやコミュニティ協議会が全部引き受けろという話ではない。ベースとして、自治的な武蔵野

市を作るのかどうか、もしそうだとすれば、どういうものを作るのかということが議論された上で、ではコミセンはどの部分を引き受けるのかという、話になってくると思う。

全体像がなくて、コミセンに何ができるのかという話になってしまうと、下手をすると、逆にコミセンはいろいろなものを背負わざるを得ないことになるかもしれない。コミセンが独自にできる場所はどこなのかを探すためにも、ベースの部分、全体として行政と市民が一緒になってどういう武蔵野市を作ろうとしているのかという議論があってもいいと思う。

他の委員会などでは、個別の施策の守備範囲の中だけで議論すればよいのだが、コミュニティはそういう縦割りの世界ではないので、大枠の議論をしてから細かいところに入っていかないと、方向性を見誤るような気がする。

(橘委員) 自治という非常に大きな話が出てきている。コミセンを実際に担当しているものとしては、そういった意識があるかどうか。30年前も今も同じだと思うが、東京砂漠のような非常に人間関係の薄い状況を憂いて、それを何とかしようということからこのコミュニティ構想ができたと思う。そう思うと、そこに行政的な手法である自治といったものを無理に結びつけて考えるのはどうだろうか。

「隣は何をする人ぞ」という状況を少しでもなくしていこう、その地域の人たちがみんな知り合いなのだ、顔見知りなのだ、仲間なのだという関係を、施設を通して少しでも促進していくことが、コミュニティセンター、コミュニティ協議会の役割ではないか。そこにいろいろなものを背負わせようとすると、無理が出てくるのではないか、そして本来のコミュニティからどんどん逸脱していくのではないか。

やはりそこには自ずと限界があって、行政の一部を担うようなことを、今の武蔵野のコミュニティセンター、コミュニティ協議会に期待してはいけないと思う。

(西村委員) 途中までは橘委員と同じである。コミセンで人と人が触れ合う、知り合う、人と団体が知り合うということは、非常に重要だと思っている。

しかし、その先に、やはり私たちの町は私たちが作るという意識がある。放っておいて誰かがいいようにしてくれるものではない。

(島森委員) 行政が、次回からでも入った形でやれたら、と思う点について。

たとえば、けやきコミセンでも「親子広場」を始めた。けやきでも以前から子どもたちのことについて考え、活動してきた。武蔵野市としてもそういった意味で親子広場や赤ちゃん広場を企画してきたと思う。しかし、コミュニティ活動としてやっていることと同じ

ことを行政でもやっている、ある意味で考え方としては大きな意味で当然同じことを考えてきてできあがってきているものがあると思う。市は大きな意味で子どものことを考えている、若い人たち、中高生のことも含め。そういったことを話し合っていく上で、市の考えていることを聞くことができれば、共通点や相違点、コミセンならではのやれることがわかってくるのではないかな。

(渡邊委員) この問題について論じたいというところ(資料1 P 4)に、地域社協、青少協、クリーン武蔵野を推進する会などの団体と連携して、協働の推進をするためにはどうすればいいか、ということを書いた。

たとえば安全、安心の町、あるいは福祉などいろいろな分野について縦割りで住民参加をおこない、すばらしい成果をあげてきたと思う。

だが、本当の意味の協働というのは、それぞれの組織だけでは全うできないので、その縦割りのところを、うまくつながり、省力化して効率よくやることによって、行政との協働が地域力を発揮して成功できるのではないかと感じている。

たとえば役員構成を取り上げてみても、それぞれのところで取り合いになって、錯綜している。お互いにネットワークがうまくいかないと、それぞれのところが困っており、全体としてはうまくいかない。

組織が緊急な会議を開く時に、部屋が当たらないとか。また、同じ行事を提携してやるということについても、重複したり足りなかったりしたものが錯綜して、力が分散されてしまっているのではないかな。これを何とかもう少し省力化できないかな。

今見ていると、人々がとても組織化されていると思う。人々が組織化されて、あの会議があったり、この会議があったりと、なっている。そういった同士がネットワークを作る、あるいは協働の基盤づくりにするような拠点に、コミセンがなったらいいのではないかな。

具体的に言うと、今度新しく建てる場合には、事務所機能をよくし、印刷機など機器類をきちんとおいて、各団体にブースを持っていただいて、同じ場所で連絡をしたり、印刷したりすることであれば、お互いに連携を取り合いながら、やることができる。それぞれの目的と自主性を尊重しながら、それを協議会がコーディネートしていく。それぞれ団体がやることを、建物の民主的な管理、運用を通じて、ネットワークづくり、協働を作ることができれば、それこそ行政と協働できる1つの拠点になるのではないかと考えている。

(高田委員長) コーディネートの着想はどこから持ってきたのか。

(渡邊委員) あり方懇からである。いいことだと思う。(コミュニティ協議会は)先頭に

立った事業主体ではなく、それぞれが自主的にやっているものをうまくお互いに連携を取り合う。それから、市の情報、全般的な情報がいちばん置きやすいところがコミセンである。そういったことをしっかり受け止めながら、各団体がいろいろなことをやる時に相談に乗る、そうやってきたら、事務局を扱う責任者は、かなりの人材も必要だと思う。

(高田委員長) 今の話は、コミセンの役割、といったところでもっと具体的になると思う。

(高田委員長) 役員の取り合いになる、とはどういうことか。

(渡邊委員) たとえば、いろいろな形で組織を作る場合に、それぞれ充て職的に作ったり、またいくつも役を持つことになる。そのことが全体としていい面もあるが。

(高田委員長) 1人の人がいくつも役を持つということか。

(渡邊委員) その通り。

(高田委員長) 自治という言葉が出てきているが、自治というのはそんなに恐ろしいものではない。先ほど西村委員が言った「私たちの町は私たちが作る」という感じで、自分に関することは自分で決定するというだけの話であって、自分のことを自分で決定することが非常にできにくい状況になっている、それを普通に戻そう、というだけの話。今やりたいのは、自治というのは自分のことは自分で決める、自分の生活は自分で決めるのだということであると思っている。そういう大枠である。

コミュニティ条例というのは、市民自治を実現してきたものだと思う。学者が作った文章だから、実際ものがない時に外から引っ張ってきて書いているのでこなれていないところはあると思う。難しいことを書いているが、市民が自分のことを自分でコントロールするというシステムを作ろうというところでやっている。それが30年間経った。その時は、行政が、言ってみれば市民に花を持たせたというか。本来ならば、行政と市民が対等な立場でいろいろなものを作っていくことがベースだと思う。

今ならパートナーシップという言葉がある。しかし当時は、行政が圧倒的に強かった、今もそうだが、市民のほうに圧倒的に弱い。そのため、そちらの力をパワーアップさせるために、行政は黒子として引いて、市民を前面に出しておこなった。逆にそうやったので、「成熟社会におけるコミュニティの在り方」に出てくるように、行政のほうに引いてしまったというマイナスの効果があった。逆に今、パートナーシップ、市民、企業、行政、第三セクターという考え方、そういったものが出てきたところならば、今なら行政も前に出てきて一緒に考える。

たとえばこういうことを話す委員会でも、行政がどこに座るのかということとはとても難しい話である。そこをどうするか。逆にそういったことを考える時代が、30年経って出てきたのではないか。

(清本委員) パートナーシップという考え方に一縷の疑問がある。行政というのは専門家であって、われわれ市民から見ると非常に力の差を感じる。本当のパートナーシップというのがあり得るのか疑問。

(高田委員長) これは作っていかないと仕方がない。全てプロセスというところで完成体がないので、常に何かやっていくということは仕方がないのではないか。市民のほうにほとんど力がないので、公共サービスは、両方の利点を生かしていく。公共サービス、つまりコミュニティづくりは、両方の利点を生かしてやっていくということではないか。行政の役割もあるし、市民の役割もある。そこにゴミが落ちているから、行政に電話をして「拾ってくれ」というようなばかなことは言わないほうがいい、自分が拾えばいいのだから。そういうことではないか。

(事務局) 行政の考えを聞きたいということについて。今年3月に市の方針として調整計画が出ている。その中で市民協働なども進めていくとある。コミュニティについてもいろいろな問題が出てきているので、第六期のコミュニティ市民委員会を設置するとある。市長はそれを受けて市民委員会を作り、諮問項目を4つ出している。行政の考え方で特にそれ以上はないので、その中でやっていただきたい。

市民協働についても、NPO活動促進基本計画に沿って、市民協働を進めると明言している。また、コミュニティについては、行政の方からでここまでやってください、と線引きをするのは非常に難しい。市民委員会で検討していただいたものを意見としていただいて、施策に反映していくという形になっている。

行政にここを聞いてみたいということがあれば、他の所管部署も呼んできて話をすることはできる。

(江上副委員長) 行政の話を伺いたいと言ったのは、まさに今の話をきちんと整理して、流れを教えてほしいということ。

(事務局) 調整計画の話をして、市民協働、NPO活動促進基本計画の話をしてほしいということであれば、話をすることはできる。

(高田委員長) 市のほうが市民との協働ということで、どのような考えを持っていて、それがどういった施策に反映されているのかということころを、次回話していただきたい。

(渡邊委員) たしかコミュニティ条例にコミュニティに関わる基本的な問題については、市がこれを定めるといような条文があった。市が定めたものというのは何を見れば分かるのか。

(事務局) 第4条「市はコミュニティづくりに関する総合的な施策を策定し、実施するものとする」のことか。

(渡邊委員) 「総合的な施策を策定し、実施するものとする」というところの、この施策の策定に関して、ここの委員会があるのか。

(事務局) 基本的にはその通りである。こちらの委員会で第五期までいただいた提言に沿って市は施策に生かしている。

(高田委員長) 事務局から、これからのスケジュールを説明してほしい。

(事務局) 進捗状況によるが、今回と12月はコミュニティのあり方や、コミセン、コミュニティについての意識の統一を図るために、ご議論いただこうと思っている。1月に各協議会から意見を聞く。当然そこには八幡町の問題がある。八幡町の問題は陳情を受けてから2年ぐらい経っているので、できればその辺をご検討いただきたい。中間報告は夏ぐらいになるが、八幡町の問題についてはある程度の大きな方針を出していただければと考えている。

(高田委員長) 八幡町に関する中間報告を出すということか。

(事務局) 文書で正式なものをとということではなく、八幡町については陳情も出ているので、今の状況を見ていただき、協議会からの意見も聞いていただいたうえで、委員会として何らかの大きな方針を出していただければと思う。

3) ヒアリング時、各コミセンに「尋ねたいこと」

・事務局より、資料5について、各委員の意見を5項目に分類した旨を説明。

(高田委員長) 事務局が整理したヒアリング項目について、どうか。

(近藤委員) ヒアリングというのは、こちら側で何か聞きたいことがあって、その担当者に意見を出してもらおうということだろう。この項目で聞いてどうするのか。

ヒアリングに対して、われわれは何を求めてやろうとしているのか。

(高田委員長) 自由参加でコミセンを見学する予定だが、それと合わせて意見交換会では意見を聞き、まずは現状を知ろうということでもいいのではないか。

(清本委員) 聞くことを3つ5つに決めて、たとえば「そのコミセンがいちばん力を入

れていることは何ですか」といったことは必ず全部に聞くとか、「そのコミセンの活動でいちばん自慢できることは何ですか」と、比較的単純なことを口頭で聞く。文書では詳しく書いていただくにしても、口頭で聞くことは、それでもたくさん違いが出てくると思う。

また先日出てきていた、コミセンがみんなに利用されていない、偏った人たちの利用になっているのではないかという問題もある。乳幼児を持ったお母さんたちがあまり利用していない、団塊の世代が利用できていない、また中高生のことなど、そういった問題に絞って、「乳幼児のことについて、どうやっていらっしゃるでしょうか」といったことで、問題を浮き彫りにするために、私たちが感じていること、聞いたり、見たりしていることを現実確かめていく、そういった観点で質問したほうがいいと思う。

(近藤委員) 質問する時の項目立てとしては、やはり諮問事項の4つから離れないで、その視点から聞くということが必要ではないか。

(西村委員) コミュニティ、コミュニティ活動、コミュニティセンターをいかなるものだと考えているかといった抽象的な質問は答えにくい。たとえば「コミセンがあつてよかったと思った経験」「コミセンでこんなことができそうだ」「自分のコミセンでいちばん大事にしていること、自慢していること」といった質問の方が答えやすいのではないか。

どういう答えが出てくるのかによって、そのコミセンがコミュニティやコミセンをどう考えているかも、ある程度分かるのではないか。

(高田委員長) 事務局が整理した一覧の中から、これがいいというものがあれば言っていただきたい。

・各委員が最優先で聞きたい質問をピックアップし、以下の5つの質問を抽出した。

- 1、あなたのコミュニティ協議会ではどんなコミュニティを作りたいと考えていらっしゃいますか？
- 2、コミュニティ活動の中で一番自慢できることは何ですか？
- 3、中高生及び50代60代の男性に対し、あなたのコミセンではどのように関わっていますか？
- 4、コミセンで今後「こんなこともできそうだ」、ということがあったら、お聞かせください。
- 5、コミュニティセンターの管理運営でいちばんの悩み、あるいは困っていることは何

ですか？

○意見交換会の形式について

- ・16 コミセン8つずつに分けて、2回開催することに決定。
- ・日程は1月23日（金）と、1月26日（月）に決定。

○運営委員会の視察について

- ・自由参加でいくつかのコミュニティセンターの運営委員会の視察を行う。日程については事前に事務局より委員に連絡する。

〔了〕